



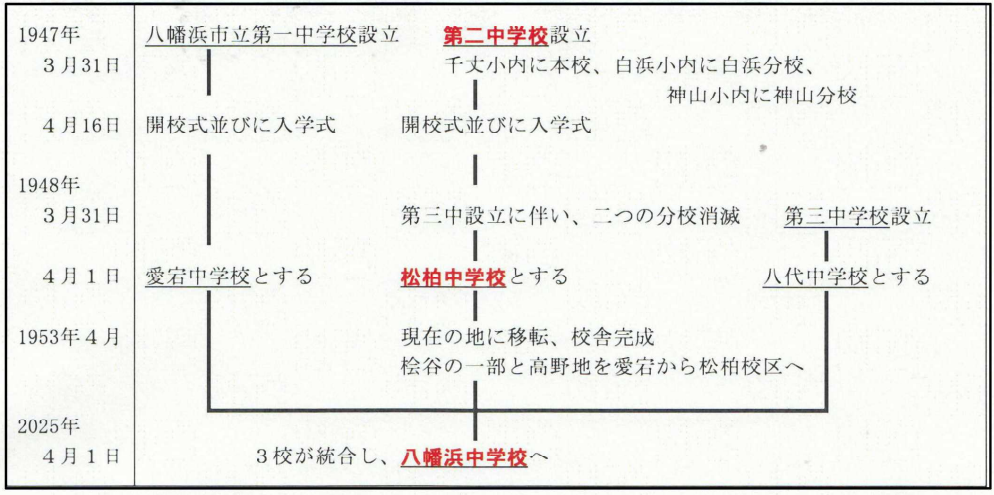
きらめきタイム「アーカイブコース」責任者：山村 好克
(タイトルの背景は旧校舎)

八幡浜第二中～松柏中～(新制の)八幡浜中へ

昨年の12月、熊本に行く機会があり、昼食時間を削って、熊本大学に行きました。わずか30分のキャンパス滞在でしたが、いろいろと考えてみました。熊本大学で見たかったのは校内に残る旧制第五高等学校(注1)の校舎です。明治時代に国内に八つ整備されたナンバースクール(注2)の一つで、堂々たる構えでした。校内には夏目漱石他の銅像や石碑があり、文化人の活躍と、五高を愛した熊本市民の思い(注3)が感じられました。大学の西隣には、県立済々黌(せいせいこう)高校(注4)がありました。

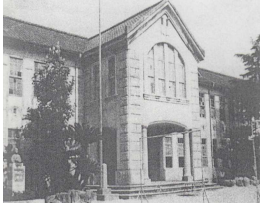
- 注1：今の学校制度で言えば、大学の前半2年に当たる、教養を学ぶ官立(=国立)学校です。1949年まで存続しました。
- 注2：旧制高校は30以上作られました。明治時代に作られたのは八つで、第一(東京)から第八(名古屋)までありました。その後作られた松山や弘前などのネームスクール(地名高)に対して、八校はナンバースクールと呼ばれ、格式が高かったです。また、五高対七高(鹿児島)戦のように、スポーツなどの対抗戦で競い合い、市民は彼らを熱狂的に応援しました。
- 注3：夏目漱石が旧制松山中学(現松山東高)の後に赴任し、英語を教えました。学生たちの文芸面での活動は校内外で展開され、熊本市内でも文化が栄えました。
- 注4：熊本県で最も古い高校です。ライバルは県立熊本高校です。二校は互いに切磋琢磨し合い、優秀な人材を世に送り出しました。済々黌はくりいむしちゅーの2人、熊本高校からは宮崎美子が出ています。

こじつけがひどいと思われるかもしれませんが、下の学校の変遷図を見てください。



1947年、現在の新制中学校制度が敷かれ、八幡浜市には第一中学校と第二中学校が生まれました。第二が松柏中の前身です。(写真上は第二中の表札です。)遅れて第三中学校も誕生し、こころに八幡浜におけるナンバースクールがそろい踏みとなりました。愛宕、松柏、八代の市内3中学校は、お互いにライ

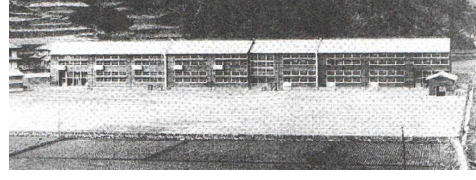
バルとして位置付けられたわけです。他県には仙台一高と二高、水戸一高と二高のように、現在もお戦前のナンバースクールをまねて、文武で競い合う伝統校(中・高)があります。愛媛県ではこういう流れはあまり聞きません。地域での好敵手関係で盛り上がるのは、新制大洲中から分離独立した大洲北中と大洲南中の対抗戦が一番有名でしょうか。ナンバースクールから始まった八幡浜市の愛宕中、松柏中、八代中は、学校規模(生徒数)こそ違いがあるものの、常にライバルとして競い合ってきたのです。市民はこの三校の競い合いに注目し、声援を送ってきたと思います。また、長い年月の中で、スクールカラー(=校風)も形成されました。



【第一中・愛宕中】



【第二中・松柏中】



【第三中・八代中】

良きライバルとして77年間

誕生する八幡浜中への思い

その3校がこの春に統合されます。1年前、郷土史家が集まる会合の中で、こんな声を聞きました。「八幡浜中学校かあ。宇和島、大洲ようやく追い付いたなあ。いや、これからは南予どころか、愛媛県で輝いてほしいなあ。」年配の方の発言ですが、これには少し説明が必要です。

旧制高校について触れましたが、その前段階が旧制中学です。今の高校の前身です。愛媛で最も古いのが松山中で「坊っちゃん」の舞台です。その後、南予では宇和島中（現宇東高）ができ、遅れて大洲中（現大洲高）ができます。八幡浜の生徒が上の学校に進もうと思えば、宇和島中や大洲中に進まなければいけなかったのです。八幡浜で文化が育ちにくかった背景には、八幡浜は商都であり、城下町ではないということ。これに加えて、旧制高校や旧制中がなかったことも大きかったと年配の方は考えているのではないのでしょうか。町のシンボルであり、市民の誇りであり、様々な人物を輩出してきた旧制中学校、しかも市の名前を冠している中学校。この発言は、旧制と新制をごちゃ混ぜにしていますが、旧制中学への憧れで、ようやくその中学校が八幡浜に誕生することからの発言だと私は受け止めました。深読みしすぎでしょうか。単に人数が多く、にぎやかだった愛宕中や松柏中時代を懐かしんでいるのかもしれませんが。

さまざまな世代が期待をこめてスタートする八幡浜中学校です。



【1976年・松柏中正門】

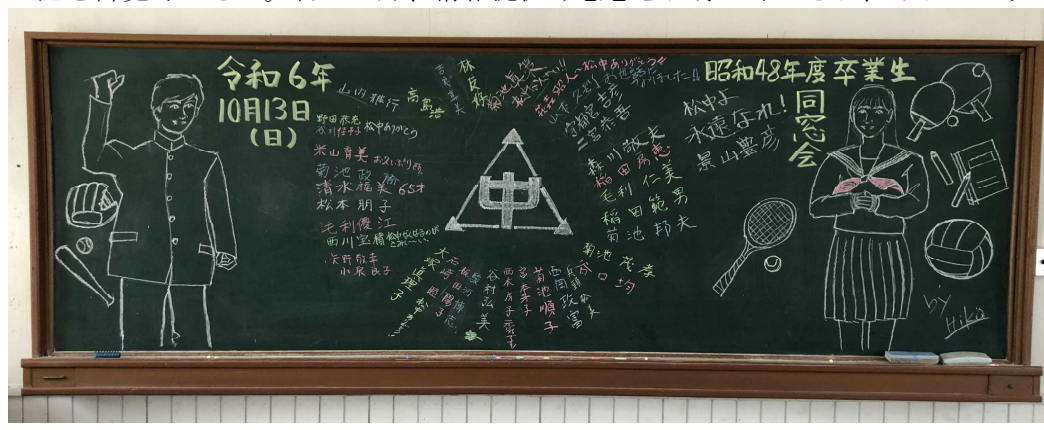
アーカイブ活動（「閉校記念誌」編集・通信の発行）を終えるに当たって

総合的な学習の時間を使って令和5年度から始まった松中のアーカイブ活動は、今年度、「閉校記念誌」の編集という大きな役割を担いました。資料収集、整理、テーマごとのまとめという大変な作業でしたが、楽しく進めていくことができました。こういった作業は、本来なら教職員やPTA会員の方々と部会を編成し、手分け作業を進めていくというのが理想です。実際、学校沿革史78年分のデータ入力や写真のスキャン、卒業生名簿の点検作業を本校教職員で何度も慎重に進めていきました。ただ、78年の歴史の中で、資料の鑑定や位置付け、編年を行うという部分では、分担よりも一人の方が作業が進めやすいということで山村の方で作業を行いました。また、アーカイブ通信は、資料の提供を呼び掛ける役割を担いつつ、テーマごとに資料を整理して発行することで、「閉校記念誌」本編の章立てを行うヒントにすることができました。時間を使っての編集・発行は随分遠回りのように感じていましたが、結果的には本来の目的を達成するためのベストな方法だったと思います。

私事になりますが、私は大学で日本近世史（江戸時代）と考古学を専攻しました。4年間の学びで身に付けたのは、「地域のことを記録する」技術（執念？）です。教師になりたいと思ったのは愛宕中3年生のときの社会科の先生との出会いがきっかけでした。それも一般の社会科教員ではなく、地域のことを調べて授業に生かすという姿勢です。中3だった年、NHKの大河ドラマで「獅子の時代」が放送されていました。菅原文太が演じた主人公は明治の秩父事件のリーダーで架空の人物でした。ところが、1年間の放送を終え、この主人公にはモデルがいて、事件後は警察に追われ、埼玉から流れ流れて八幡浜で亡くなったことを突き止めたのがこの先生でした。

将来は八幡浜で、地域にこだわる中学校の社会科の教師になりたい。共通一次試験の結果、志望先を変えて入った大学の文学科日本史研究室でした。ところが偶然ですが、ここの日本史研究室は恩師の出身研究室でした。教師として最初に赴任した中学校は恩師も最初に赴任した中学校でした。7年間の勤務を経て、八幡浜に戻って松柏中学校に。前任者が恩師でした。以来、地域の歴史の研究と一緒に進めてきました。恩師との最後の共同作業は『八幡浜市誌』第1巻歴史編の編集でした。

今回の「閉校記念誌」の編集でも、恩師が書いた資料のおかげで作業を進めることができました。3月には「閉校記念誌」が完成し、皆様のお手元にお届けできる予定です。何度か説明させていただきましたが、紙幅の関係で、この通信に今まで紹介してきた内容までの情報は掲載できていません。運動会や文化祭などのテーマごとに最小限度での情報を紹介しています。この通信と比較しながら記念誌を御覧ください。約9か月、情報提供や感想をお寄せくださり、ありがとうございました。



【西校舎2階元被服室】

黑板には昨年10月13日に訪ねてきた卒業生による書き込みがありました。昭和48年度卒業生です。「松中よ永遠なれ！」とあります。